ある日突然、地下迷宮

ウィリアム・輝夫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ある日突然、地下迷宮

【Ｎコード】
Ｎ０５２７Ｗ

【作者名】
ウィリアム・輝夫

【あらすじ】
ある日、目が覚めると、俺はうす暗い洞窟の中にいた。もちろん、寝る前に洞窟に散歩しに行ったとかそういうことはない。恐らく、家の中で寝ていたに違いないのだ。それなのにどうしてこんなところにいるのだろうか。しかも、見たこともない青いジャージを着ている。俺はどうしたのだろう。誰か、助けてくれ…。
というような小説を書こうと思います。
かなりな部分、ＰＳＰのゲーム、「ゴッドイーター」をパク…い

や、リスペクトしております…。

「ある日突然、地下迷宮」

「日本海側　暴風や大雪など警戒」

という文章が俺の頭の中をよぎった。寝る前に新聞でも読んだのだろうか。よくわからないが、やけに粘り強くその文章が頭の中を反響している。そして、目が覚める。

ここはどこだろう。薄暗くて、じめじめしているが、温度は丁度よかった。洞窟みたいである。俺は、鍾乳洞の下で寝ていた。布団や毛布などはない。辺りは、真っ暗ということはなくぼんやりと光っている。

しかし、俺はこんなところに来た覚えはない。いや、そもそもが俺は誰だろうか。自分の記憶がさっぱり抜け落ちていた。

自分が若者の男性で日本人であることは知っていたが、あとは真っ白になってしまっている。そして、ふと手を見ると、右手が真っ黒になっていた。まるで、爬虫類の手みたいになっている。爪も黒く鋭く伸びていた。

「おっす。
よくきたな」

と急に俺に声をかけてきた男がいた。

黒ぶち眼鏡をかけて、黄色いジャージを着ている俺と同じ歳、多分、二十代中ごろくらいで、声がやけに低い男だった。

「俺、キー坊っていうんだ。
好物はカレーな。
よろしく」

というと、握手をしてきたが、キー坊の手も爬虫類のような手をしていた。

「黒い右手」

「ひょっとして、お前も記憶喪失かい。俺は、昨日『家政婦のミタ』ってドラマを見て、寝て、それから、ここにいるんだよ。
で、五分くらい歩いていたら、お前に会ったのさ」

キー坊は、自分の黒い手を見つめながら呟いた。

「お前の手も一緒だよな。俺は黄色いジャージ、そしてお前は青いジャージを着ている。これはどういうことなんだろうか」
「うーん。
わからない。
何かのどっきり企画とかだろうか。
にしても、二人とも記憶喪失ってのがなあ。
俺もそうなんだよ」
「俺もドラマのこと以外はまったく真っ白なもやがかかったように、わからなくなっているんだ」
「気味が悪いな」
「そうだな。
俺は自分の名前はキー坊ってのは覚えているんだ。
お前は、名前は覚えていないのかい」
「タロー。
今、俺の頭にそんな言葉がよぎったな。まあ、それじゃあ、タローにしておこうか」
「よし、これでお互いに名前を呼べるな。
ああ、よかった」

といっておいて、キー坊は少し笑う。

「まあ、何もよくはないんだがな、実際。
それにしても、この手、何だろうかね」
「うーん」

と二人が話している間に、洞窟の隅のほうにあるトンネルから腐った魚のような匂いが漂ってきた。二人が顔をしかめていると、全長６０センチくらいの巨大なオタマジャクシのような怪物が、羽根をはばたかせて、こちらに迫ってきた。

「あいつは、俺達のファンじゃないよな」

とキー坊はいった。

「怪物だよ。
逃げろ」

俺は後ろを向いて走った。

「追い詰められて…」

二人が逃げたトンネルの先は１０ｍくらいで行き止まりになっていた。後ろから、空飛ぶ巨大なオタマジャクシがやってくる。

「まあさ。
須藤茉麻。
マイ恋人にしたい芸能人ナンバーワン。
俺は死ぬ前に、お前とデートしたかったあああ」

とキー坊は泣き叫んだ。

「もうこうなったらやるしかないな」

というと俺は拳を固める。

「うりゃあああああ」

と俺はダッシュして、パンチを決めようとするが、オタマジャクシは急に後退して、空を殴る俺の体勢がおかしくなったところを再び、突進してきた。
俺はあっけなく吹っ飛ばされる。
そして、壁に頭をぶつける。

「痛い。
何だ、こいつ。
やっぱり、強い」

という暇もなく、オタマジャクシは、巨大な一つ目のすぐ下にあ

る牙を光らせて、俺の首筋を食い破ろうと近づいてきたが、

「バキッ」

そこをキー坊が蹴り上げた。

「どおおおりゃあああああ」

オタマジャクシは、弾き飛ばされるが、すぐに空中に浮かんで、咆哮をする。牙が恐ろしい。

「死ぬ。
俺は死ぬ。
何で俺はこんなところで死ななきゃいけないんだ」

頭から血を流しつつ俺はキー坊に訴えた。

「今、あいつを蹴ったんだが、ものすごく重かったよ。
足がしびれるんだ。
これは俺達じゃ適わない。
多分、これ死ぬな…」

キー坊は涙を流しながらヘラヘラ笑った。

「鬼の手、発動」

巨大オタマジャクシの怪物を前にして、俺達はとうとう命を奪われるのかと、覚悟をしていたら、不意に、俺の右手が輝いた。
俺の頭の中に、ハンマーと機関銃と巨大な盾のイメージが浮かんできたのだ。しかも、そのどれかを選ぶ必要があるらしい。俺はとっさにハンマーを選ぶと、急に

「シュッワッ」

と音がして閃光がきらめくと、右手に１ｍくらいはあるハンマーが握られていた。しかも、やけに軽い。まるで、新聞紙を丸めて握っているようなものだった。

「おうわっ。
何だこれ」

ふとキー坊の方を見ると、１ｍはある大砲を肩から提げている。

「武器だよね。
この手が光って、武器が…」

とキー坊がいっている間にオタマジャクシが襲ってきた。
俺は、ハンマーで

「ガシッ」

とぶんなぐる。
するとオタマジャクシは、血を噴出させて下がった。

「うおおおお
大砲発射あああああ」

キー坊は、砲撃をした。爆音を立て、キー坊は後ろに吹っ飛ばされそうになるが、踏みとどまる。
黒煙が辺りを多い、煙が晴れると、オタマジャクシに直撃したみたいで、真っ黒になった死体が転がっていた。
二人の手にしていた武器はさっと消える。

「あれ？
勝っちゃったよ」

キー坊は座り込んだ。

「そうだね。
多分、この手が俺達を助けてくれたんだろうけどね」
「ああ。
何でこんな目に遭うんだろうか。
振り返れば俺の人生、こんなことばかりだったような気がするな。

ま、記憶喪失で覚えていないけど」
「とにかく、この洞窟から出ないとなあ」
「はあ、面倒なことになったもんだ」

今後もこのような怪物が出てくるかもしれないが、俺達は、このままここにいてもしょうがないので、洞窟の中を進むことにした。

「これはゲームなのか？」

しばらく二人は歩いていたが、歩けども歩けども洞窟は続いていた。

「それにしても、この手、面白いな。
心の中で、念じると、ポンと、二種類の武器、あるいは、盾が出てくるんだからね」

といいながら、キー坊は、大砲と電気ノコギリと黄色い盾をひっきりなしに、出現させては消させていた。
俺も真似をして、機関銃を出したり、ハンマーを出したり、青い盾を出したり引っ込めたりしていた。

「どうも、俺達は何らかのゲームに巻き込まれたのかもしれないな。

これはまるで、俺の知っているゲームみたいなんだもの」
「どんなゲームなんだい」
「うーん。
それが思い出せないんだよ。
ひょっとしたら、誰かが、記憶をなくした方がいいだろうということで、俺達の記憶を消去しているんだな」
「そうだろうねえ。
それにしても、俺の色は黄色なのか。
黄色というと戦隊物でいえば、色物キャラだよな。
そもそも、キー坊って名前だって、黄色からきているのかもしれん。
ああ、にしても、お腹が空いてきたな。

カレーでも食べたいよ」
「ああ、そうだな」
と二人が話していると、急にご飯の匂いが漂ってきた。
キー坊は顔をしかめる。
「こんな洞窟の中に、食べ物があるというのか」
「わからん。行ってみよう」
すると、角を曲がったところに、うどん屋の屋台があった。
六十歳くらいのおじさんが椅子に座って、新聞を読んでいる。
この意外で急な展開にキー坊はすっころびそうになる。

「うわああ。
人間だ。
おい、おっさん」
「はいよ。
うどん食べるかね」
「おっさんは、ここに住んでいるのか」
「うどん、食べるかね」
「おっさあああああん」
「うどん、食べるかね」
まるでロボットのように同じ言葉を繰り返すだけであった。
「うどん…食べます」
二人は黙って椅子に座ってうどんを頼むことにした。
「やはり、これはゲームなんだ。このおじさんも作り物なんだよ。

しょうがない。うどんを食べよう。とりあえず、腹ごなしをした方がいいだろうからな」

キー坊はそういうと、たぬきうどんを頼んだ。

俺は頷くと、天ぷらうどんを頼んだ。

「吟遊詩人、真野、登場」

うどんは、薄味でありながらだしがきいていておいしかった。俺は関東人なので、濃い方を食べることに慣れていたが、たまにはこういう味も良いものだ、と思った。スウプに太目の麺がうまく合わさって、俺は、このうどんという簡単で質素な料理の奥深さを神に感謝した。もちろん、うどんだけではなく、その上に乗っている天ぷらも美味だった。特に、海老だけではなく、烏賊らしきものも入っており、その食感の差が食べるものを、独特な魅惑の世界に引き込むものであった。

「うまいなあ。
特に、体を動かした後のうどんは、これはもう、何物にも変えがたいね。まさにうどんでしか今の感動を俺に与えることはできないな」

と俺は少し涙ぐみながら呟いた。

「まったく、その通りだよ。
こんな薄暗い迷宮で、うどん屋台があって、こんなプロの手作りのうどんを食べられるなんて…
いい世の中になったものだ」

とキー坊は空を仰いで目を閉じた。
すると

「ルルルルル
ルルルルルル〜」

という歌声が聞こえる。

「うどん♪
どうして、お前はそんなにおいしいのか。
たんなる粉で作った素朴な麺なのに。
お前は、みんなを離さない。

うどん♪
今日は、素うどんに卵をかけて食べよう。
君のおいしさを生で感じたいのさ。
つるつるしこしこ、最高だ」

俺とキー坊は、新しく椅子に座った男の歌つきのギター演奏に拍手する。
彼は、緑色のジャージを着ていて、いろいろ話してみると、どうやら、俺達と境遇が同じで、記憶喪失になって、この地下迷宮の中をさ迷っているようであった。
彼は、痩せ型で、話し声が小さくて、独り言のように呟いている感じに思えた。どうやら内気な人間らしく、しかしながら、その内気さが、彼を歌というまったく正反対のベクトルの芸術に向かわせるようでもあった。

「俺は吟遊詩人の、真野っていうんだ。
よろしくね」

というと、うどんを食べる。
俺は、新しい仲間とこのおいしいうどんに乾杯したくなったが、うどん屋には酒はおいていないようであった。

「戦士達の休息」

うどん屋台で、俺達が話し込んでいると、屋台の柱時計が十一時を指した。

「おい。
もう寝る時間じゃないか」

と真野はいう。

「しかし、寝場所ないしなあ」

周囲は洞窟であり、通路は、１０ｍくらいの幅があり、高さは５ｍで、そんな中に屋台があったのであるが、しかし、さすがに寝床はなさそうであり、そこら辺に寝転がるしかないのか、と思うと、うどん屋の主人が

「ほら、すぐそこに寝床があるから、そこで寝な」

と指をさす。
そこを見ると、横穴が掘ってあった。
俺達三人は、進むと、穴は十畳くらいの部屋に広がって、ふとんが部屋の隅に畳んであった。

「なるほど、確かに寝室だな」
「もう、眠いから寝よう」
「ああ」

というと三人は、あっという間に布団を敷いて寝てしまった。
俺は、寝ている間に、この迷宮での出来事が夢だったのでは、という夢を見たのであるが、目を覚ますと、やはり洞窟の中であり、現実であった。

「さあ、今日も旅を続けるか」
「ああ」
「もう、やだよ」

等といいつ三人は、出発をする。
やはり昨日のような洞窟であったが、しかし、しばらく行くと急に崖になっていて、吊り橋があった。下の方ははるか遠くまで闇になっており、底に何があるかはわからないが、落下したら死ぬだろうな、ということはわかった。
実は、俺は恐怖症だったが、しょうがないので渡ることにした。吟遊詩人の真野は、ギターで「吊り橋の歌」という自作の歌をうたいながら渡っていた。キー坊も平気みたいだった。
ちょっとした揺れにビクビクしながらも３０ｍくらいの吊り橋を渡り終える。するとそこは、四方が崖に囲まれた部屋のような空間になっていた。部屋というよりももっと広く、１０ｍ四方はあったであろうか。

「何か嫌な予感がするんだよな」

とキー坊が呟くと、昨日見た感じのオタマジャクシが翼で空を飛びながら、向こうに吊るされている吊り橋を通ってやってきた。

「どうやら、バトル開始らしいな」

というと俺はハンマーを手に握った。

「落星」

「待て、ここは私が行こう」

というと、吟遊詩人真野は、ギターを背負い、怪しく白く光る剣を手にして、怪物の方へと歩いてゆく。

「あれが、伝説の剣、モーンブレイドか」

キー坊は腕を組んで呟く。

「そんなに有名な剣なのか」

「ああ、昨日、本人がそういっていたんだ。

彼はどうやら歴戦の戦士らしい。

俺達も、戦い方のイロハを教わらなくてはいけないかもしれないな」

「なるほど」

島のようになっている場所の真ん中で、空を飛ぶオタマジャクシと、真野は対峙した。

「さあ、こい」

と剣を構える前に、オタマジャクシはタックルをしてくる。

真野は吹っ飛ばされた。

「うぐうわあああ」

オタマジャクシはこの攻撃の成功に気をよくして、さらに勢いを

つけて、急降下してきて、真野を後退させた。

「うぬぐわあああ」

真野は、あと数歩で崖に落ちてしまいそうになる。
すると、髪をはらい、真野はニッコリと笑った。

「これぞ、まさに背水の陣というやつだな。
俺は、ピンチになるたびにワクワクしてくる性格なのだ。
ハッハッハッハ」

と笑い終わる前に、オタマジャクシは急降下してきて、危ういところを剣で弾き返し、少し後退した真野であったが、運の悪いことに、足を踏もうにもそこは崖であり、宙を踏んでしまい、あっという間に真野は落下して、崖の闇の中に消えてしまった。

「あうううううあああ
真野さん」

キー坊は、へたり込む。

「な…何てあっけない最後だ」

俺も叫んだ。

「たしかに、あっけなかったかもしれない。
だが、真野さんの落ちてゆく様はとても…とても美しかった。
まるで流星のように…。
あああああ…うぐわあああ」

キー坊は目から涙、鼻から鼻水を惜しげもなく流す。

「真野さん…。
あんた…、一体何だったんだ。
真野さん…
真野さああああああああああん」

俺は虚空に向かって叫んだ。
俺の中では、うどんをおいしそうに微笑んで食べる真野の、嬉しそうな顔が浮かび上がってきた。
そして、その姿は陽炎のようになり、ゆらめいて、涙の中に消えていった。

「弔い戦」

「ちっくしょう。
あの善人そのものの真野さんを亡き者にするなんて」

俺は立ち上がり、ハンマーを手にして走り出した。

「くううううううそおおおおおお」

とオタマジャクシに切りつけた。すると、打撃を受けたオタマジャクシは一瞬にして消えた。

「あれえええええええ。
弱っ」

俺は唖然とする。

「まさか、あいつ弱い怪物なんじゃ…」

キー坊も大砲を構える。
もう一匹いた怪物に照準を合わせて撃つとこれもあっという間に消滅した。

「うわあああ。
じゃ、じゃあ、何で真野さんは…」

俺は崖の方を眺める。

「多分、俺達の想像を越えるほど、ものすごく弱かったんだろう。
詩人としては一流だが…戦士としては…」

キー坊は空を仰いだ。

「真野さん。
天は二物を与えず、ということか」

俺はハンマーをしまい、西の方を向いて少しの間、手を合わせた。

「再会」

俺とキー坊は拍子抜けしながらも吊り橋を進み、さらに続くややこしく複雑な洞窟の中をさ迷い歩き、しばらくすると広場のようなところにたどり着く。

そこには

「たこ焼き屋『ＨＡＳＩ』」

という看板がある四角くおしゃれな二階建ての建物があった。

「いい匂いが漂ってくるなあ」

とキー坊。

二人がお店の中に入ると、驚きの展開が待っていた。

何と、さきほど死んだはずの真野が、たこ焼きを食べていたのである。

「あれえええ」

「オバケか」

と俺達は叫んだ。

「いや、違うんだよ。

よくわからないけど、気がついたらここにいたんだよ。で、たこ焼き屋ということだから、今、たこ焼きを食べているんだよ。

おいしいよ。ほら頼めばいいじゃん」

と真野は、たこ焼きを頬張った。

「あの時、流した涙は一体何だったんだろう。
まあ、でもよかった」

と二人は真野の隣に座り、

「たこ焼き二人前」

と頼んだ。
主人は、髪の少しとんがった赤い制服を着た青年であった。

「はいよおお」

と少し高めの声で答え、たこ焼きをあげる。

「あとご主人。
俺は、わさびマヨネーズね」

と俺は食べたこともない珍しいものを頼む。

「はいよおお」

と徳永英明辺りを思わせる少しハイトーンなヴォイスで、主人は答えて、たこ焼きをひっくり返す。

「真野さんはおいしいといったが、俺達グルメの舌は誤魔化せられないぜ」

とキー坊はいうと腕を組んだ。

「たこ焼き店長ハシ　前編」

俺達二人は、たこ焼きを食べた。これはとてもおいしいもので、口の中でほくほくとタコのかもし出す磯の香が広がり、しばらく恍惚感にひたっていると、作業着を着た中年男がやってきて、俺達の隣のカウンター席に座り、

「どうだ。
俺は毎日ここでハシさんの焼くたこ焼きを食べているんだ。
彼はB級グルメの王者だよ。
ガハハハハハ」

と笑うと男は、タオルで顔を拭いた。
ここの常連のゲンさんという電気工事師らしかった。
ちなみに彼も何故かこの世界にいるらしくて、毎日ぶらぶらしているらしい。

「君達、怪物退治をしようとしているね」

とハシは厨房から現れた。すらりとした長身の青年であった。

「ええ。そうだけど」

キー坊はたこ焼きを口の中でモグモグさせながら答える。

「だとしたら、この先に、猿神コンガーというやつが出てくる。
あいつには勝てないぞ」

といったのだった。
「そんな強い奴なの」
と俺。
「そうなんだ。
俺は何回か戦ったが、まったく勝てなかった。
だから、元々、たこ焼き屋だったということもあって、ここでたこ焼きを売っているんだよ」
「でも、やるしかないな。
だって、先に進まないと現実世界に戻れないみたいじゃないか」
「ああ。
それでも一回戦えばわかると思う。
勝てないよ、あいつには」
「そんなこといわないで、一緒に協力してくれよ」
と俺は頼んだ。
するとハシは暗い顔をして首を振る。
「いやあ、無理だなあ。
俺はもう、諦めているよ」
という会話をしているとゲンさんが叫んだ。
「バッキャロー！
ハシ」
というとゲンさんはハシを殴り飛ばした。

「たこ焼き店長ハシ　後編」

「ゲンさん。
あんた何をするんだ」

倒れたハシは頬をさする。口からは少量の血が流れていた。

「ハシさんよ。
あんた、心のどこかでくすぶっている炎がまだあるんだよ。
あんたは諦めちゃなんかいないんだ。
俺にはそれがしっかりとわかったよ」
「そんなことない。
猿神コンガーは、凶悪な化け物なんだぞ」
「ふっ。
でも、あんたは、この一行を見て、ひょっとして彼らと組めばあるいは、倒せるかもしれないと思ったんだよ」
「な…何でそんなことを…」

ゲンさんはたこ焼きのパックを見せた。

「俺は毎日、お前さんのたこ焼きを食べている。
お前さんのたこ焼きは感情がすぐに仕上がりに影響するんだ。
わかるんだよ。
たこ焼きの味でな。
今日は、あんたは、暗いところから抜け出そう抜け出そうというような気持ちでたこ焼きを作ったんだ。
俺も…俺も、同じことを考えていた。
だから、わかるんだよ、味がな。

お前のたこ焼きが、
『戦いたい』
と訴えているんじゃねえか」

ハシさんはうなだれる。そして何故か外人のように肩を低くして

「参ったな」

と呟いた。

「そう。さすが、ゲンさんだ。
本当は俺も戦いたいと思っている。
でも勝てるだろうか。
本当にわからないんだよ」

ゲンさんは、ハシの肩を叩く。

「俺はお前達が勝つ方に賭けるな。
何故なら、ハシさん。
あんたのたこ焼きは日々成長して、ここまでおいしくなったんだ。

やれる、今のあんたならやれるよ」
「わかった。
じゃあ、俺も参加するよ」

というとハシさんは握手を求めてきた。
俺は、その熱い光景をしばらく見ていて

「いやあ、青春っていいな」

と感心しながら握手した。

「猿神コンガー」

洞窟の幅広いトンネルの真ん中で、急に先導していたハシは立ち止まる。そして、笑顔だか怒り顔だかわからない表情でこっちを見る。

「ここから、しばらく行くと、やつがいる。
やつは、ゴリラの大きさが三倍になったような化け物で、背中に背負った砲台のようなものから竜巻を吹かせてくる。
しかも、突進もしてくる。
いいか、絶対に死なないようにね」
「うーん。
何かそれ怖いな」

とキー坊はもうすでにガクガク震えている。

「私こそは一度死を見てきた男、大丈夫だ。
さあ、皆の衆、栄光の勝利に向かって進もうではないか」

と真野は平気な顔をしている。
俺も、親指を立てて、ニッコリ笑ったが、正直、恐怖心がないとはいえない状態だった。
皆が進むと、巨大な広場に出る。そして、その中央に毛むくじゃらな生物が座っていた。何かを食べているらしい。
そいつは立ち上がり、俺達に気付くと、いきなり電気を発して、クルクル空中を回転して、俺達の方向に飛んできた。

「ええええもう戦闘始まっちゃう…」

ということもできすに、真野は

「ズビャアアアアア」

と感電してコンガーに衝突し、壁に吹き飛ばされ、ボロ雑巾のように転がった。

急いでかわした俺達は得物を取り出して、敵に備える。

「速い…。

あまりにも速過ぎる」

唖然としてキー坊は呟いた。

「そうだよ。

キー坊君。

やつは高速で飛んでくるんだ」

というハシにキー坊は首を振る。

「いや、コンガーも速いが…。

真野さんがやられるのが速すぎる、という意味で…」

俺は、こんなやつに勝てるのかと、正直思ったが、いきなり仲間が減ってしまった三人の戦意にも影響するので口に出さないでおいた。

「ハイスピードバトル！！」

改めて見ると、猿神コンガーは呆れるほどに大きい。しかも、肌が鋼のように光っているし、腕は人間の胴と同じくらいの太さである。奴は、こちらを向くと、歯を剥き出しにして

「ウキー」

と叫んだ。
そして身を沈める。

「竜巻くるぞおお
盾を構えるんだ」

とハシが叫んだので盾を急いで構えると、コンガーは、背中にある羽衣みたいなところから、真空の竜巻を発生させて、こちらに飛ばしてきた。
俺は、数歩後退する。

「本当に速いな、こいつ」

キー坊は横に回った。
そして、電気ノコギリで切りつける。
血が飛び散るが、コンガーはそんなにうろたえない。
怪我の一つや二つではひるまないらしい。

「ドゴン
ドゴン」

ハシは、バズーカーから火球を発射してコンガーにぶつける。
それでも、コンガーはそんなに気にしないで、急に、俺の方に背を伸ばし、巨大な拳でパンチしてきた。
俺は吹っ飛ばされる。

「うがあああああ」

ものすごく痛い上に全身血だらけになる。
ゲームといっても痛感はちゃんとあるのだ。
俺は急いで立ち上がると、コンガーは俺を追ってこちらへ飛ぶように駆けてくる。

「もうやだよ」

と俺は泣きたくなったが、横っ飛びして何とかかわす。
キー坊とハシは一斉射撃をするが、あまりのスピードに追いつけないようで、弾はあさっての方に飛んでゆく。

「こいつ、無理だよ」

と俺は弱音を吐いていると、今度は電気を発して空中回転して飛び込んできたので、バッと転がってよける。

「まさにハイスピードバトル！」

とキー坊は叫んだ。

「恩返し」

コンガーの背中には、赤い色をした筒状の衣が二つついており襷(たすき)のようであった。まるで、日本画の雷神みたいである。その衣から、球状の竜巻が出てくるのである。日本画の雷神はそんなことはしなかったが、恐らく雷神よりも確実に強いのではないか、と思えた。

しかも、それ以外にも、活発に動き回ったり、放電しながら回転移動したりと手のつけられない化け物であった。

俺達三人は、初めの内はうまくかわしていたが、段々、疲れてきて、しかもこの戦いはいつになったら終わるかわからないので、戦意も萎えてきた。

「ああこいつもうやだ」

とキー坊は叫ぶ。

「うざいうざいうざいうざい」

と砲撃するが、そんなに効いている風には思えないのである。

ひょっとしたらどこかに弱点があるかもしれない。と思っていると、

「うひゃあああ」

たこ焼き店長ハシが、コンガーの回転アタックに激突して、弾き飛ばされた。

全身、血まみれになっている。

「うがあああ

いでえええええ」

そんなところに

「大丈夫か」

と助けの手が入った。

何と、彼の店の常連、電気工事技師のゲンさんだった。

「体力回復剤を持ってきたぞおお」

とハシに飲ませる。

しかし、足の遅そうなゲンさんを、コンガーの残忍な目が捕らえる。そして、コンガーは背中から竜巻を噴出して、ゲンさんに投げつけたのだった。

「ゲンさん。

危ない」

俺は叫んだが、ゲンさんは、ハシさんの方に集中して、コンガーの方をまったく見ていなかった。

次の瞬間、ゲンさんは空に吹き飛ばされ、地面にありえない向きに体を曲げて激突した。

「ゲンさあああん」

俺は駆け寄る。

ゲンさんは、満身創痍で薄目を開けていた。

「へへへへ。

馬鹿だったな。
あいつのたこ焼きに魅せられたばかりに…こんな頼まれてもいないのにお節介をしちまって…。
挙句の果てが、こうだよ。
でもな…。
俺は何だかわからない内にこの迷宮に送り込まれてしまった。
絶望の中で、あいつのたこ焼きが、俺の気持ちを慰めてくれたんだ。
だから、せめてもの恩返しをしようかと思ってな…。
もし、あいつが生きていたら伝えてくれ。
たこ焼きおいしか…った…とな…。
ゲホッ」

と血を吐いてゲンさんは目を閉じる。

「ゲンさあああああん」

俺は泣き叫んだ。
そしてコンガーに向き直る。

「このおおおお
やろおおう」

「瀕死仲間」

俺は怒りに身を任せ、迫ってくるコンガーに機関銃を連発するが、ひるむことは一切なくコンガーはこっちまでやってきて、殴ってきたのですぐにかわした。

「うおおおお
何とかならんか」

と俺はハンマーで殴るが、コンガーはそんな俺の動きを無視して、両腕を伸ばしてグルグルその場を回る。
俺は吹っ飛ばされて、

「もう、もう、このおおおお」

と機関銃を連射する。
コンガーは、弾をくらいながら倒れる。

「チャアアアアンス」

と起き上がろうとしたら、後ろから撃ってきたキー坊の大砲の弾が俺の背中に当たって俺はまた少し前進した。

「あっごめん」

本来なら即死ものであるがやはりこの一連の出来事はゲーム内の出来事のようで、俺は生きていて、しかし、立ち上がったコンガーの目の前に出てしまい、前に進むコンガーにぶつかって弾き飛ばさ

れる。

「うぎゃあああああ」

こうして俺はまるで、キャッチボールの球のように飛ばされて、倒れたときにはもう瀕死であった。

「こんな…こんなかっこ悪い死に方したくない…」

と呟いたが、その隣に同じく瀕死の真野がいて、呟く。

「大丈夫だ。
俺よりは…カッコイイから…」

「弱点」

常連さんのゲンさんの必死の介抱で復活したハシは、ヒートドリルという先端の尖った小型の槍を手にして、コンガーへ向かって駆けてゆく。

「ゲンさん…あんたの夢、この俺がしっかり受け継ぎ、継承してゆくぜ。
俺は勝つ。
そして、この悪夢の迷宮から脱出するんだあああ」

と宣言した瞬間に、コンガーは予備動作なしに急に、あの電気をはらんだ空中回転をしたので、ハシは口から血を吐いて倒れる。

「グハアアアア。
こんなことで負けん」

とすぐに立ち上がり、回転殺法をするコンガーを追いかけて、止まったところで、ヒートドリルの連打をしようとするが、あろうことか、一瞬の隙も与えずに、コンガーはまた空中回転を始め、ハシはこれには弾き飛ばされた。

「うおおおおお
痛い…痛いが、ゲンさんの苦しみに比べればこんなもん」

とズザザザとノックバックしたが、ふんばって、またコンガーを追う。

「ハシさん、どいてくれ。
俺の渾身の一撃を化け物にぶつけるんだアアアア」

とキー坊が叫ぶ。
ハシはすぐに飛びのくと、巨大な爆炎の塊が、コンガーの背中めがけて直撃した。
コンガーの尻尾の毛が消滅して、肉質のようなものが出てきて、コンガーは唸りをあげる。

「まさか、あいつの弱点は尻尾なのか！！」

キー坊は叫んだ。

「反撃ターイム！」

ハシはヒートドリルを光らせる。

「勝利」

ハシは一気に飛び込んで、コンガーの尻尾を重点的に狙う。コンガーは、尻尾がひりひりするらしく、立ち止まったりしゃがみこんだりが多くなった。そして、急に逃げ出そうとまでし始めた。

「そうはいくかあああ」

とハシは連発で、腕の筋肉がつりそうになるほどヒートドリルでコンガーの尻尾を突きまくるとコンガーはついに倒れて虫の息になった。

「勝利だアアア。
よおおおし。
勝利の雄たけびやりまあああす。
うおおおおおおおおお」

キー坊がコンガーの真似をして叫ぶと、コンガーは急に復活して、キー坊を吹っ飛ばした。

「うがあああああ
いてええええええええ」

キー坊はしゃがみ込む。

「油断したな、キー坊」

倒れながら俺はニヤリと笑う。

「さっさと終わりにしようよ。
こんな泥試合」

と真野も呟いた。

「うおおおおおおおおお。
最終攻撃これだあああああああ」

とハシは残るすべての力を使って近づいて、コンガーの尻尾を突いて突いて突いて、肉質をぶち破ると、コンガーの顔が真っ青になり、そして、再びコンガーは倒れ、絶息した。遂に俺達は完全に勝利したのだった。

「勝った」

ハシはへたり込んで叫ぶ。

「ううううひゃっほおおおう。
やったあああ。
ゲンさん、勝ったんだよ」

キー坊も叫ぶ。

「まあさ。
まあああああさあああああああああ。
大好きだあああああああ。
これ、見ているかあああああああ」

俺は何とか起き上がり、二人の健闘を称える。

真野も立ち上がりコンガーの死体を小突いていたが、コンガーはしばらくすると、真っ黒になり蒸発してしまった。

「辛く苦しい戦いだったな」

と真野は汗を拭う。

「お前がいうかっ！！！
まあ、何でもいい。
俺達は勝ったアア。
ありがとおおおおう。
まあああさあああああああ」

キー坊は全然関係のないことを吼えた。
広大な洞窟の闇はキー坊の声を吸収し、まだ奥へ奥へと続いているようであった。

「ガールズバー『ロシア娘』」

俺達はグネグネした地下迷宮の中を疲労困憊でさ迷っていたが、うす暗い中にピンク色の照明がぼんやりと映ってくる。

「おお。
やっと、やっと第１９話にして女の子、登場か。
長かった。
一体、どうして女の子が話に絡んでこないのか、読者もみんな疑問に思っていたに違いない。
やっほおおう。
まあさあああ！」

戦闘のストレスによって壊れてしまったキー坊は叫んだ。

「だから、まあさ関係ない」

俺は冷静につっこみ、どんどん先に行くと、

『ロシア娘』

というネオンの文字が読めた。
しかもさらに近づくと

『ガールズバー』

とある。

「やったよ。
ウひゃあああああああほおおおおおっう！
まあさあああああああ」

とキー坊は叫んだ。
吟遊詩人真野がそれをたしなめるのかと思ったら、腕を組んで満足そうな笑顔を浮かべている。

「ハシさん…何とかいってくださいよ、こいつらに」
「えっ、別にいいんじゃないの。
さあ、行こうよ」

と皆、ノリノリだった。
そして、スウィングドアを開ける。
するとそこには異様な光景が広がっていた。
裸の男達三人が、泣きながら正座しているのである。
それを、巨大な剣を手にした肌の白い女がガミガミ叱責していた。

「あんたら無銭飲食の末にセクハラまでしやがって、どういうことだああ。
おい、そこのデブ、答えろおおお」

男の内の一人は、片目が腫れ上がっていて見えなくなっていた。

「すいません。
もうしないですから許してください」
「このバッキャロー！」

というと女は形の良い黒いガーターを履いた足で蹴り上げる。

「ぐぎゃあああああ」

そしてもう一人のカツラをしている人のカツラをもぎ取って、

「このヅラ没収なっ！」

とゲラゲラ笑う。

「この屑どもら、お前ら、皿洗い、小間使いとして三日間こきつかうからな。社会を舐めんなよ」

と吼えてから、俺達の存在に気付いたロシア娘はニッコリと笑った。

「あ、いらっしゃいませ。

ここは、暖かい夢の国、砂漠の中のオアシス、ガールズバー『ロシア娘』でございまああす」

一礼をする。

「あの姉ちゃん、怖い」

とキー坊は棒立ちになっていた。

真野も震えていた。

ハシも顔が青くなっていた。

俺はちょっと

「いいな（ハート）」

と思った。

「可愛いアイシャ」

改めてみると彼女はとても美しかった。身長は１７０センチくらいあり、ロシア人であるから肌が白く、顔はまるで彫刻のようで、髪は銀色で、スタイルは抜群であった。服装がとてつもなくエロく、格子縞の下乳が覗いている上着は、肩とお腹が露出しており、ミニスカートを履いていて、黒いガーターストッキングを履いている脚線美が艶かしい、大剣を持っていなかったら普通の可愛いロシア娘であった。

「あたし、アイシャといいます。
よろしくです」

というと、皆を奥の方の席に案内する。

「あっ、そういえば、あそこにコンソールあるじゃないですか。ＡＴＭみたいなやつ。あれを見ると、いろいろパワーアップとかできるんですよ。知ってました」
「へええ」

俺はすぐさま、部屋の隅にある銀色に光るコンソールへと近づいた。すると、

「冒険者用端末。

御用の方はボタンを押してください」

と表示されていたのでボタンを押すと、指紋で俺のことを認証し

たのか、

「タロー
経験値　１２３
ゴールド２００」

俺の情報が現れる。

「おおお。
これはすごい」

端末を調べると、俺達はどんなゲームに参加しているのかの情報も書いてあった。

「２０ＸＸ年。
世界各地に邪神が発生し、人類の脅威になった。
人々は、巨大で凶暴な邪神達と戦い、どうやらこの邪神は、ある地下迷宮から出てきたことがわかった。地下迷宮に棲む恐ろしい邪神を倒すために、歴戦の強者たちが集い、遂に最終決戦が始まろうとしていた。
君は生き延びることができるか？」

というよくあるゲームの説明書みたいな文章だった。

「うーん。
こんなゲームに俺達は強制参加させられているのか…。
たまったもんじゃないな」

俺が皆の席に戻ると、アイシャは、別のテーブルにいたマナーの悪い客の頭の上からコップの水を流して、

「ゴミ屑はこの店にくるんじゃねえ」

と笑いながら言っていた。

俺達は背筋を伸ばし、粗相が一切ないように気をつけることにした。

少しでも気を抜くと、何をされるかわからないからである。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0527w/

ある日突然、地下迷宮

2012年1月13日15時46分発行